

日本大学商学部公開講演会 『“知識”と“暮らし”の融合 シリーズ7』

公のなかの私、私のなかの公

Private in Public, Public in Private

日本大学商学部教授・博士(商学)

桜井 徹

目次

- I. 今、なぜ公と私を問題にするのか:私たちの共同研究の紹介を兼ねて
- II. 公と私の語義
- III. 公と私の関係の歴史的変化
- IV. 公のなかの私、私の中の公
- 補論:アダム・スミスの同感・道徳・正義論
- V. むすびに

I. 今、なぜ公と私を問題にするのか: 私たちの共同研究の紹介を兼ねて

- ① 私たちの共同研究の名称と構成メンバー
- ② 公と私を研究する意義: 公と私の境界と関連

①私たちの共同研究の名称と構成メンバー

a. 名称:公と私をめぐる企業・経済・社会の統合的研究

b. 構成メンバーと課題

1. 桜井 徹(教授):総論と民営化における公と私
2. 吉田達雄(同):公共政策における公と私
3. 小阪隆秀(同):企業と社会
4. 鈴木由紀子(准教授):企業の社会的責任と企業倫理
5. 村井秀樹(教授):地球環境問題における公と私
6. 小島智恵子(教授):原子力政策における公と私
7. 長谷川 勉(准教授):ソーシャルネットキャピタルにおける公と私
8. 飯野 文(専任講師):貿易ルールに現れる公と私
9. 折井善果(慶應大学専任講師):Virtueにおける公と私
10. 安原伸一郎(専任講師):近代化における公と私

②公と私を研究する意義:公と私の境界と関連

- a. 現実の多くの問題が公と私の内実とその関連の解明を必要としている
 - 1. 民間委託・民営化問題
 - 2. 私企業(株式会社)の社会的責任
 - 3. 「新たな公共」とNPO
 - 4. 東日本大震災と福島原子力発電所事故
などなど
- b. そうした研究は、学際的におこなう必要がある

Ⅱ. 公と私の語義

- ① 漢字の公と私
- ② 日本語の公と私:オホヤケとワタクシ
- ③ 英語の公と私:publicとprivate

①漢字の公と私

a. 公

1. 「私に背くことを公とする」「公は平分なり」「公平無私」
2. 権力性(首長性)と「共同性」(倫理性)

b. 私

1. 私 禾(=穀物) + 「厶」(=腕の形)。収穫物を腕でかかえこんでひとりじめにする意(『広辞苑』)
2. 非倫理性:曲私

②日本語の公と私

a. オホヤケ

1. 大きなヤケ(施設):厩(うまや)、宮、三宅
2. 首長性と共同性(首長性に重点)
3. 「社会的公共」という意味での「公」は成立しなかった(水林 彪(2002))

b. ワタクシ

1. 一人称としても用いられる:「是の天つ神の御子は私に生むべくあらず」(『古事記』神代)
2. 公に従属することを前提とする :公田(くでん)と私田
3. 公と私の重層構造(私が公となり、公が私に転化する)とする見解もある(庶民の家・家臣の家・大名家・将軍家)

③英語の公と私(AHD)

a. Public(n.)

1. The community or the people as a whole.
2. A group of people sharing a common interest.
3. Admirers or followers, especially of a famous person
4. ラテン語のpopulus(人々)を語源
5. 共同性の意味が高い、権力性の意味が低い:.類似概念official


b. Private(adj.抄出)

1. のa: Secluded from the sight, presence, or intrusion of others.
2. 2のa: Of or confined to the individual; personal.
3. 3. Not available for public use, control, or participation
4. ラテン語のprivatus(not in public life)やprivus(single, alone)を語源

Ⅲ.公と私の関係の歴史的変化

- ① 前近代(資本主義社会成立前)における公と私
- ② 近代(産業資本主義段階:18世紀後半から19世紀)における公と私
- ③ 現代(独占資本段階:19世紀末から20世紀後半)における公と私
- ④ 今日(20世紀後半から現在)における公と私

①前近代における公と私:未分離

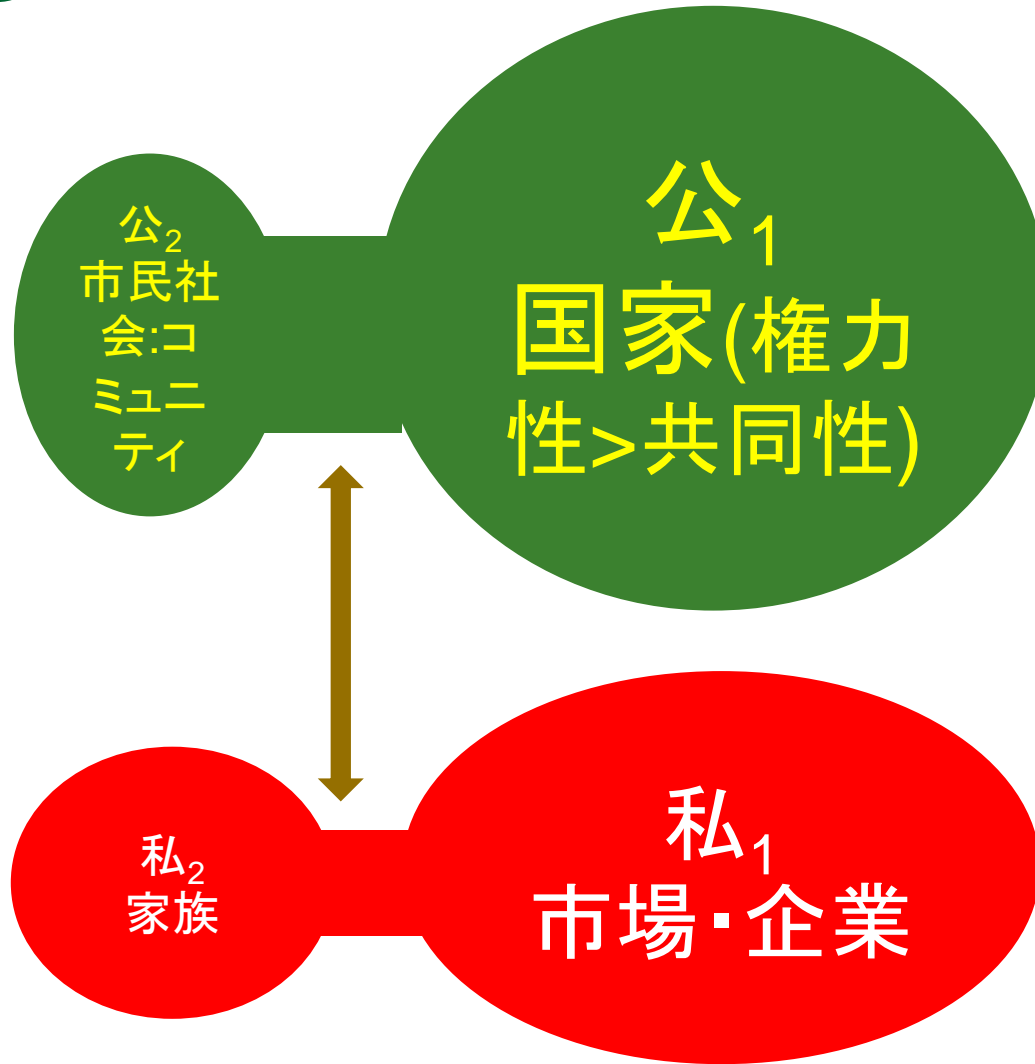


公(権力性・
共同性)

私

公と私の意味
および未分離
の程度は西
洋・東洋・日本
などで異なる

②近代における公と私

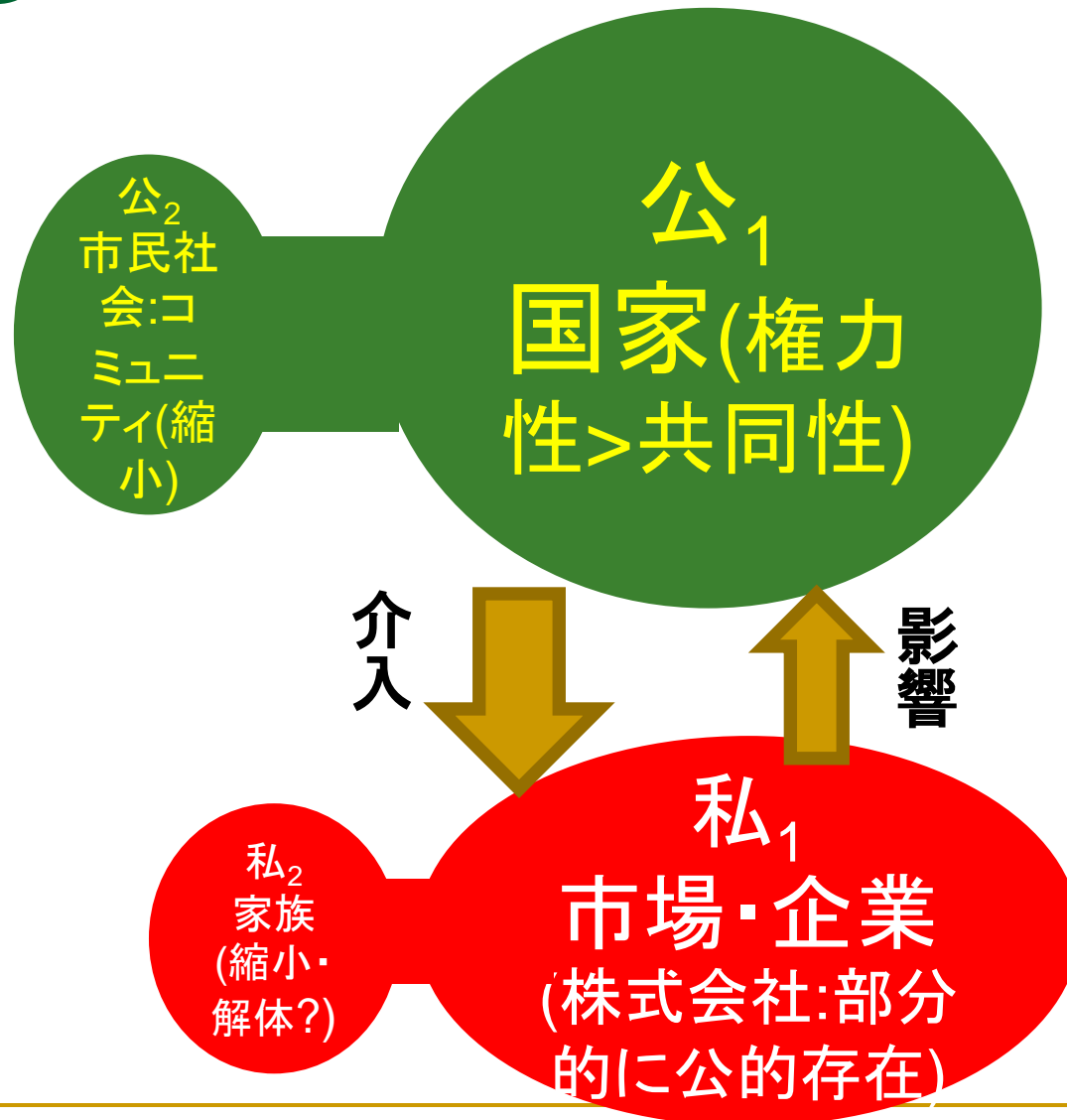


二つの分離

1. 公と私の分離: 自我と私有財産
 2. 公における(国民) 国家と市民社会との分離
 3. 私における家族と市場・企業との分離 (井上(2009)を参考)
- ここでも、各国で各領域の大小関係など相違。

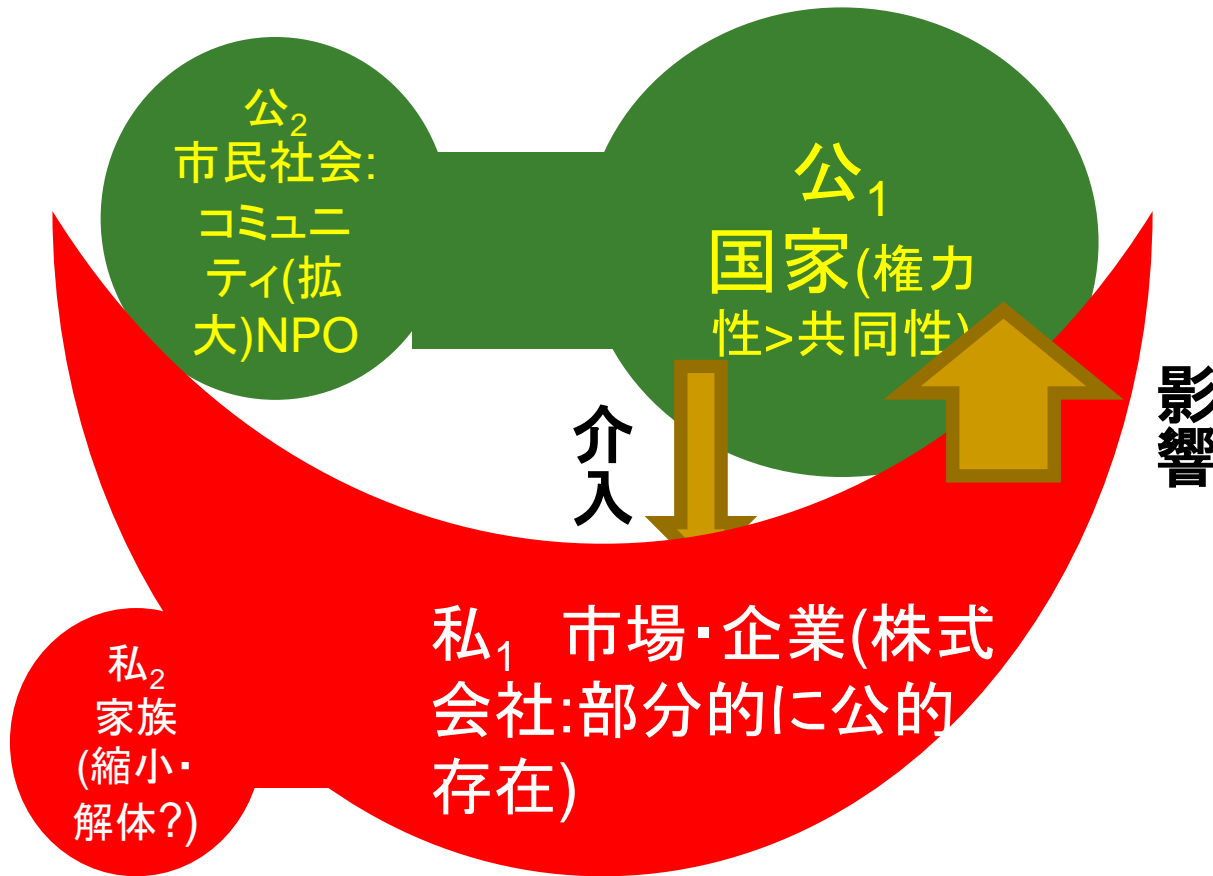
「『私』という空間が、いつどのようにして成立したのかという問題設定自体がある意味で近代的だということができる」(佐藤(2003))

③現代における公と私



1. 公における国家の拡大: 市民社会の縮小 (Habermas (1990)) と市場・企業への介入の拡大
2. 私における市場、とくに企業の巨大化

④ 今日における公と私



1. 国家の縮小(国家の市場・企業への介入の縮小)
2. 市民社会:NPOの拡大(サラモン(2007))

2. 私における市場、とくに企業の巨大化による国家の取り込み

IV. 公のなかの私、私の中の公

① 公のなかの私

- a. 国家と市民社会への市場メカニズム・企業経営方式の導入:民営化・民間委託
- b. 官僚の私的利益の追求

② 私の中の公

- a. 企業、とくに株式会社の社会的存在=社会的責任
- b. 個人の倫理:アダム・スミスの同感・道徳・正義論(補論)

補論: アダム・スミスの同感・道徳・正義論

- ① 『諸国民の富』における「私益」の追求=「公益」の達成論
- ② 『道徳感情論』における「私的行為」の基盤としての同感・道徳・正義論
- ③ 統合原理としての正義

アダム・スミス(Adam Smith)



<http://www.greekshares.com/capitalism.php>

1723.6.5(スコットランド生)ー
1790.6.17

1776年3月9日『**諸国民の富**』(An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations)初版

1776年前後の日本の主な出来事
1716年 徳川吉宗、将軍となる(享保の改革)

1774年 解体新書

1787年 寛政の改革

1776年前後の世界の主な出来事
1769年(英) アークライト水力紡績機を発明 ワット、蒸気機関を実用化

1776年7月4日(米)アメリカ独立宣言

1789年 フランス革命勃発

①『諸国民の富』における「私益」の追求＝「公益」の達成論

「人間はほとんど恒にその同胞の助力を必要としていながら、しかもそれを**同胞の仁愛(benevolence)**だけに期待しても徒労である。そうするよりも、もしかかれが、自分に有利になるように**同胞の自愛心(self-love)**を刺激することができ、しかもかれが同胞に求めていることをかれのためにするのが同胞自身にも利益になるのだ、...

われわれは、自分たちの食事を期待するのは、肉屋や酒屋やパン屋の仁愛にではなくて、かれら自身の利益に対するかれらの顧慮に期待してのことなのである。われわれは、かれらの人類愛にではなく、その自愛心に話しかけ、しかも、かれらにわれわれ自身の必要を語るのではけっしてなく、かれらの利益を語ってやるのである。主として市民同友たちの仁愛にたよろうなどとするのは、こじき以外にはだれもない。否、こじきでさえも.....」(『諸国民の富』(第1分冊)「第二章 分業をひきおこす原理について」118-119ページ)

②『道徳感情論』における「私的行為」の 基盤としての同感・道徳・正義論

- a. 人間の本性としての哀れみ・同情と想像力による
同感
- b. 同感の判断者としての不偏的(impartial)観察者
(spectator)
- c. 規範としての二つの徳:慈恵と正義

a. 人間の本性としての哀れみ, 同情 と想像力による同感への発展

1. 「人間がどんなに利己的なものと想定されうるにしても、あきらかにかれの本性のなかにはいくつかの原理があつて、それらは、かれに他の人びとの運不運に関心をもたせ、かれらの幸福を、それをみるという快樂のほかにはなにも、かれはそれからひきださないのに、かれにとって必要なものとするのである」(邦訳, 上巻23ページ)
2. 「この種類に属する」もの: 哀れみ(pity), 同情(compassion)
と想像力による同感(sympathy)

b. 同感の判断者としての不偏的観察者

1. 情念と観察者

「これらの事情だけが、われわれの同胞感情をよびおこす苦痛や悲哀をつくりだすのではない。なにかの対象から主要当事者のなかに生じる情念がどんなものであろうとも、かれの境遇を考えると、すべての注意深い観察者の胸のなかには類似の情動がわきおこるのである」(28ページ)

2. 同感

「哀れみと同情は、他の人びとの悲哀に対するわれわれの同胞感情をあらわすのにあてられることばである。」(28ページ)

3. 不偏的観察者(impartial specter)

「その憤慨とは、最大の侵害にたいする追究でさえも、それらの侵害が受難者の胸に自然によびおこす義憤によって左右するのではなく、それらが中立的な観察者の胸に自然によびおこす義憤によって左右するものである」(63ページ)

c.規範としての二つの徳:慈恵と正義

1. 慈恵(beneficence)

「慈恵はつねに無償(自由)であって、それは力づくで奪いとられるものでありえず、その単なる欠場は、いかなる処罰にもさらされない」(邦訳上巻、205ページ)

2. 正義(justice)

「もうひとつの徳があって、それを守ることは、我々自身の意思の自由にまかされず、力づくで強制されてもよく、その侵犯は侵害で」ある(邦訳上巻、208ページ)

③統合原理としての正義

「それゆえ、優先されたり、あるいは制限したりする
いっさいの体系が以上のようにして完全に撤廃されれば、**自然的自由という自明で単純な体系**が自ずから
確立される。あらゆる人は、**正義の法**を犯さぬかぎり、
各人各様の方法で自分の利益を追求し、自分の勤労
および資本の双方を他のどの階級の人々のそれらと
競争させようとも、完全に**自由に放任**されるのである。
」(『諸国民の富』邦訳第3分冊、503ページ)

V.むすびに:新しい公と私関係構築に向けて

- ① 日本における市民社会希薄の問題
 - ② 歴史的変化の評価:公の二つの要素と私の二つの要素のどれを拡大すべきか
 - ③ 今日における公と私の重層構造:公のなかの私の是正と私のなかの公の拡大
 - ④ 学際的・実証的研究の統合の必要
-

参考文献(本報告で直接取り上げた文献に限定)

- 井上匡子(2009)「アダム・スミスと近代的自我 -- 公と私の再編と親密圏」(第5回公と私研究会2009年11月19日での報告資料)
- 佐藤和夫(2003)「家族・親密圏・公共性-H・アーレントの公私観の視角から」山口定ほか編『新しい公共性 そのフロティア』
- サラモン(2007)『NPOと公共サービス 政府と民間のパートナーシップ』ミネルヴァ書房
- 溝口雄三(1996)『一語の辞典』三省堂
- 水林 彪(2002)「日本的『公私』概念の原型と展開」佐々木毅・金泰昌編『公共哲学3 日本における公と私』東京大学出版会
- Jürgen Habermas(1990), *Strukturwandel der Öffentlichkeit - Untersuchungen zu einer Kategorie der bürgerlichen Gesellschaft*, Suhrkamp